

※各講演内容については、講演資料をご参照ください。

【パネルディスカッションでの議論】

司会（泊）：バイオマス熱利用ユーザー協会に期待することについて、お一人ずつお願いしたい。

辻会長：熱利用はユーザーの規模が小さい。中小企業では多額の投資が難しい。助成やリースなどが有効。中小企業は一つ一つは小さいが、数は多い。議論していければと思う

梶山氏：脱炭素機構は、バイオマス発電には融資を付けられるが、バイオマス熱利用には、イニシャルに補助金がつくので融資ができないとのことだ。

前山氏：今後どのように進んでいくか協会で固めていく。井村屋ではバイオマス熱利用が大型で採算が取れているが、小さいところをどうするか。バイオマスボイラーの導入で従業員の環境に対する感覚が変わった。協会によって意識を改革することが重要。

山口氏：ESCO 型で利益が得られるかどうか、業界で積み上げが増えていくと、後からやる人の参考になる。どうコストダウンしていくか。協会に情報が集約されることで後からやる人が学んでいける場所になれば。

菅野氏：燃料供給事業者が関わることも重要。バイオマスボイラーは初期投資が高いが、協会が、投資回収がしやすい案件があること、金融機関や個人投資家が1億円2億円を投じる価値がある、と思っていただけるような情報提供ができるとよい。バイオマスボイラーの使い方を学べる見学機会などを増やしていく。

岡本氏：バイオマス熱利用のユーザーは自治体、官公庁、民間で、地産地消は大きなメリットである。民間は収益性を重視する。ESCO やリースが有効。長期的にはメリットがある。

武内氏：バイオマス熱利用には川上から川下までさまざまな課題がある。導入したいと思ったとき、初期投資の補助金が重要。直近のエネルギー基本計画でバイオマス熱の記述がなくなったが、この協会が、今後大きなうねりをつくり、事業者、メーカーを引き込んで全体的な政府への要望ができるとよい。

安藤氏：バイオマス熱利用は、ユーザー、燃料供給、エネルギー生産、排熱利用などが関係する。辻製油での導入においても初期は様々なトラブルがあって、一つ一つクリアして今がある。バイオマスの熱を供給する側の都合、使う側の都合をマッチさせていくことが重要。辻製油は両方の経験がある。協会を通して情報の共有ができればと思う。

山本氏：石油の輸入が20兆円あり、関連産業はその10倍の規模がある。その中でバイオマスを1社でも増やしていきたい。情報交換しながら拠点の一つとして協会を位置づけている。会員募集をしている。

梶山：化石燃料への補助金はやめてもらいたいと思う。

泊：昨年急逝された、農都会議の事務局長であった杉浦さんが何年もかけてこの協会の準備

を進めてこられた。NPO ではなく、事業者が産業としてやる、業界を盛り上げる、つくり上げていくことが趣旨だと考えている。ご意見、要望をいただき、形づくっていただくと考えている。

【質疑】

Q：バイオマス熱で製造した製品であることを製品自体に付加価値としてエンドユーザーに知らせているか。その事例は。知らせていないならその理由は。

安藤氏：植物油を生産する際、カーボンフットプリントとして GHG 評価をしているが、製品には明言していない。他社では試験的に行っているところもある。

前山氏：環境にやさしい商品ですよということを、販促、営業トークに使っている。アップサイクルセンターで豆腐製造の際に出るおからをバイオマス熱で乾燥させている。パッケージには書くまでには至っていない。

菅野氏：自分の講演資料 17p にある事例だが、アパホテルで使われているミネラルウォーターのラベルにバイオマスによるものと書かれている。

Q：山口氏の講演で ESCO 事業のなかでストーブが入っているが、そのメリットデメリットは。

山口氏：再エネ化に取り組む方法の一つとして薪ストーブ、ペレットストーブの住宅や小規模事務所の導入を ESCO プログラムに入れた。メリットは CO2 対策、地域経済など。デメリットは特にないが、継続できればよかった。

Q：この協会は、木質バイオマスに限るのか？

泊：メタン発酵に関しては日本有機資源協会（JORA）、温水利用は日本木質バイオマスエネルギー協会（JWBA）が従来から様々な活動を行っている。産業用熱利用とその周辺がエアポケットのように抜けているので、他のバイオマス熱を排除するものではないが、他の団体とすみ分けをし、この協会ではそれを中心にと考えている。

以上、オンラインに関するトラブルもあったが、会場およびオンラインで約 100 名の方が参加され、概ね参加者からは高い評価をいただいた。ご講演、ご参加、ご協力いただいた皆様、どうもありがとうございました。